

修理免本郷遺跡

1992年3月

大社町教育委員会

は じ め に

修理免本郷遺跡は、大社町大字修理免本郷一帯の広範囲に遺物が散布する遺跡で、昭和42年の土地改良中に発見されました。

大社町教育委員会では、大社町大社線対策課から依頼を受けて平成2年度に大社町みせん広場整備事業計画予定地内に所在する修理免本郷遺跡の発掘調査を実施いたしました。

これまでに大社町では遺跡の存在は多数知られていましたが、発掘調査を行われたものは少なく、大社町の埋蔵文化財について十分わかっていないのが現状であります。

この度の調査は範囲確認調査であり時間的にも十分な調査ができなかったため、この遺跡の性格を知ることはできませんでした。今後さらに調査をすすめることは、大社町の文化財の保護と活用を図っていく大切な足掛かりになると確信しております。

なお、この調査にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位並びに地元の方々に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が今後の文化財保護と郷土の歴史を知る資料としてご活用いただければ幸いです。

平成4年3月

大社町教育委員会

教育長 大 國 喜 幹

例 言

1. 本書は、大社町大社線対策課から委託を受けて、大社町教育委員会が平成2年度に実施した、大社町みせん広場整備事業に伴う修理免本郷遺跡の発掘調査の概要である。

2. 今回は、島根県簸川郡大社町大字修理免1425-1外を発掘した。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 大社町教育委員会

調査指導 川原和人（島根県教育委員会文化課文化財管理指導係長）

丹羽野裕（同 文化財管理指導係主事）

千家和比古（島根県文化財保護指導委員）

事務局 高木茂（大社町教育委員会教育課長）

三原堅士（同 課長補佐）

佐藤隆夫（同 社会教育主事）

稲根克也（同 主事）

調査員 原俊二（平田市教育委員会社会教育課主事）

大國真二（大社町教育委員会囑託）

調査協力 杉原元治、祝部均、吉川浩、落合直人、渡部尚美、坂本隆、
祝部儀三郎、春木英男、西尾哲郎、上田忠

4. 掲載図面は大國、松本岩雄（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第三係長）、松尾晴司（島根大学学生）、新海正博（島根大学学生）が作成し、大國が浄書した。

5. 本書に掲載した遺跡の位置図（第1図）は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図大社を複製したものである。（承認番号 平6中複、第168号）

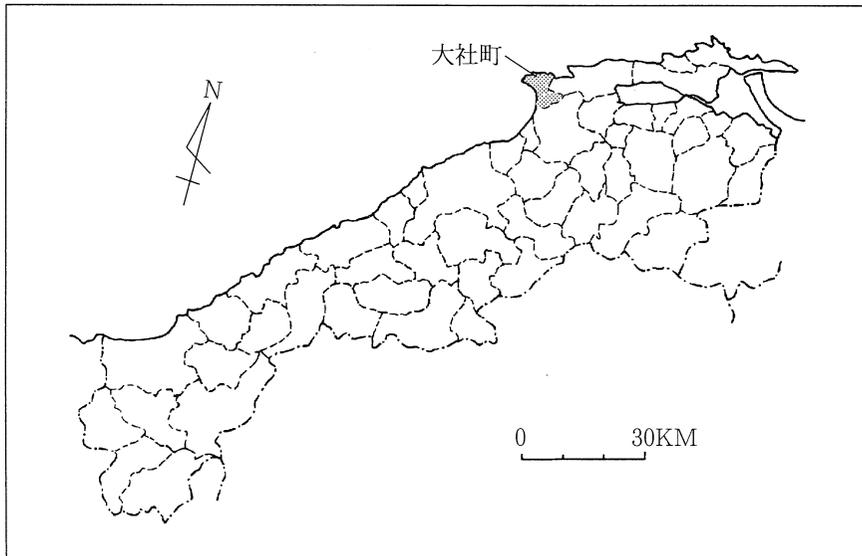
6. 本書の編集・執筆は、上記調査指導の諸先生の指導を得て、大國・稲根・原が行った。

7. 本遺跡の出土遺物及び作成した図面・写真は、大社町教育委員会で保管している。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査にいたる経緯	1
III 調査の経過	3
IV 遺跡の概要	3
V 過去の出土遺物について	10
VI ま と め	15

大社町位置図



I 位置と環境

修理免本郷遺跡は、島根県簸川郡大社町大字修理免本郷に所在する古墳時代から中世にいたる複合遺跡である。この遺跡は出雲平野の西北端に位置し、出雲大社の境内から東南に0.8キロメートルの地点にある。北側には弥山山地を望み、南には近世に掘削された堀川が流れる水田地帯であり、このあたりは沖積低地で東西に広がっており、北山山塊の薬師谷川の扇状地の先端にあたる（第1図）。

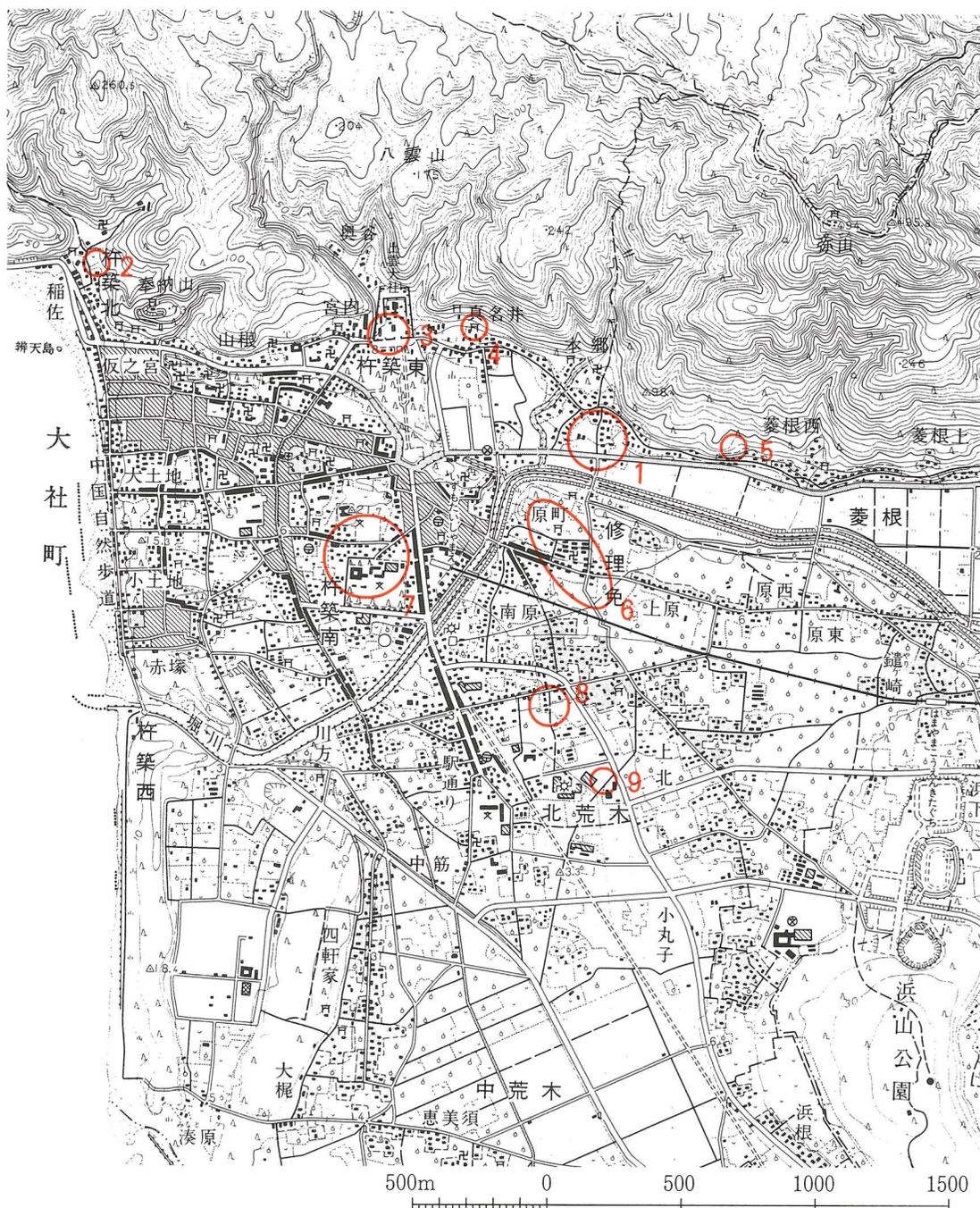
風土記時代には、この辺りは『出雲国風土記』に載る「かんだのみずうみ神門水海」と呼ばれる入り海があり、斐伊川は現在のように東流して宍道湖にではなく、西流して神門水海に流れ込んでいた。近世以降は斐伊川も東流し、新田開発により周辺の低湿地帯も埋め立てられ、それに伴い堀川が開削された。また修理免は、出雲大社の神領地であり、出雲大社の修理のため、税を免ぜられていたことからこの地名がつけられている。近年では、出雲大社教の神楽殿を御造営の際に境内の残土がこの遺跡地内の埋め立てに使われている。

付近には、北西部に縄文晩期から室町時代にいたる遺物が出土した出雲大社境内遺跡、その東側には弥生時代の銅戈・硬玉製勾玉が出土した真名井遺跡、東には縄文前期の遺跡として有名な菱根遺跡、南には近年の発掘調査により、山陰で最古の配石墓が確認され、弥生前期から中世にいたる遺物が出土している原山遺跡がある。

II 調査にいたる経緯

大社町では、平成2年3月のJR大社線廃止に伴う地域交通体系整備の一環として、正月・連休時の波動期の駐車場対策、大社・出雲市間のバスの定時性の確保、交通渋滞の緩和などを図る観点から国道431号線沿いの修理免本郷地内に駐車場・多目的広場の機能をもった大社町みせん広場整備事業が計画された。

しかしながら、この事業計画予定地が修理免本郷遺跡地内に位置するため、関係者（島根県教育委員会・大社町教育委員会・大社町大社線対策課）と協議をした結果、発掘調査を実施することにした。今回の調査は、過去に本遺跡の発掘調査をされた経緯がないため、遺跡の範囲確認を目的とした調査を行うことにした。



第1図 修理免本郷遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院 25,000分の1)

1. 修理免本郷遺跡
2. 稲佐遺跡
3. 出雲大社境内遺跡
4. 真名井遺跡
5. 菱根遺跡
6. 原山遺跡
7. 鹿蔵山遺跡
8. 南原遺跡
9. 中分遺跡

Ⅲ 調査の経過

修理免本郷遺跡は、1967年（昭和42）3月に土地改良工事中に大谷従二氏により発見された遺跡である。深さ約70センチの土中から土器等の遺物が出土したということである。本遺跡は今回の調査区から東端は菱根遺跡南方あたりまで、堀川沿いに南北150メートル、東西300メートルに及ぶ広大な遺跡であると考えられている。土器の大部分は今回の調査区から約50メートル東方で出土し、遺跡の東側ではかなりの量の木杭、柱材、流木が出土している。また、本遺跡の東端にあたる菱根遺跡真南の国道脇の水田では田下駄が出土している（第6図）。

今回は、本遺跡の指定区域の西端にあたる地点の発掘調査を行った。調査にあたっては、調査区全域に10m間隔でメッシュを組み、縦横の交点を数字とアルファベットの組み合わせで表し、南東隅の杭をグリッド名とした。その杭を基点に一辺2mの調査区を22ヶ所設定し、遺構を検出すれば拡張していく方法をとって調査を行った。調査はまず最初に、国道431号線より北側を行った。この区域は、水田であった所を出雲大社の神楽殿の御造営（昭和54～56年）の際に掘削した残土が運びこまれ、その上に約1m以上盛土をされ、畑地として耕作されている。この部分の残土を重機により除去し、それ以下の層を手掘りすることにした。重機掘削は平成2年8月9日から土層を観察しながら行った。それが完了した8月13日から調査区全域を手掘りによる発掘調査を開始した。

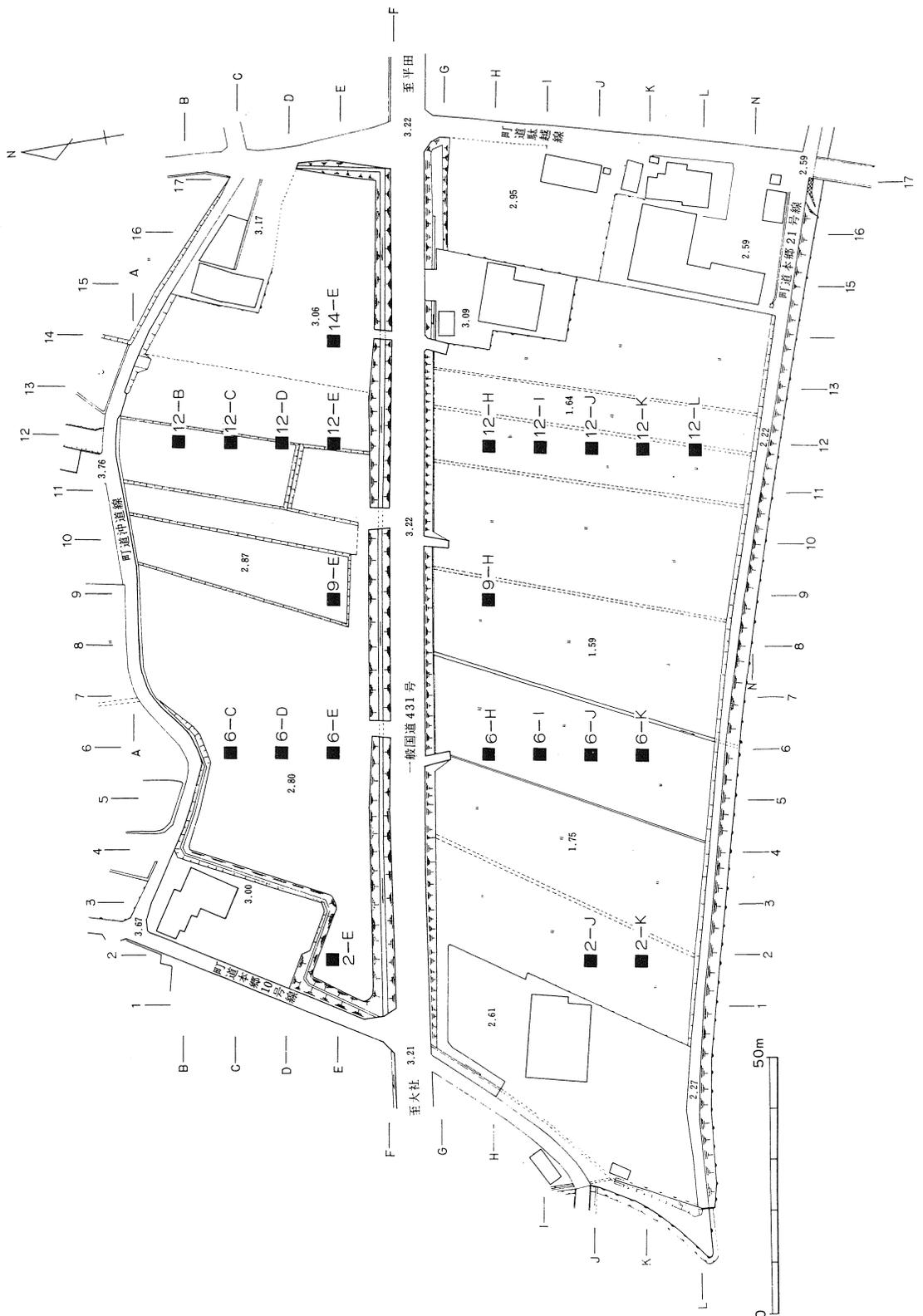
その結果、暗茶褐色粘土層から土器器片、須恵器片、流木など少量出土したが、遺構を検出することができず、これらの遺物は遺構に伴うものでないと判断した。そのため遺物は層を確認した上でとり上げた。また当初考えていたより湧水量が多く、調査を進めることが困難であると考えたため、平成3年9月10日に予定より早く調査を終了した。

Ⅳ 遺跡の概要

今回の調査は、国道431号線沿いの大社町みせん広場整備事業計画予定地約13,000㎡の範囲内に1辺2mの調査区を22ヶ所設定した（第2図）。以下、各調査区毎にその概要について記すことにする（第3、4図）。

(1) 2-E調査区

国道の北側に設置した調査区では最も西に位置しており、地表面での標高は約2.6m



第2図 修理免本郷遺跡調査区配置図 (1 : 1250)

を測る。土層の堆積状況は、表土（135cm）、黒褐色粘土層（15cm）、暗茶褐色粘土層（15cm）、白灰色粘土層（15cm）、暗茶褐色粘土層（30cm）、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。なお、全調査区の青灰色砂質土層以下については、湧水量が多く調査を行うことができなかった。したがって、層位及び遺構・遺物については確認できなかった。

(2) 2-J 調査区

2-K 調査区の北隣に位置しており、地表面での標高は約1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土（15cm）、明茶褐色粘土層（25cm）、赤褐色粘土層（30cm）、黒褐色粘土層（10cm）、暗茶褐色粘土層（10cm）、白灰色粘土層（10cm）、暗茶褐色粘土層（10cm）、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(3) 2-K 調査区

今回の調査で設置した調査区では最も西に位置しており、地表面での標高は約1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土（25cm）、明茶褐色粘土層（25cm）、赤褐色粘土層（15cm）、青灰色粘土層（15cm）、黒褐色粘土層（5cm）、暗茶褐色粘土層（35cm）となっており、この層の中には白灰色粘土がところどころにブロック状に混入している。さらにその下に青灰色砂質土層が堆積している。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(4) 6-C 調査区

この調査区の地表面での標高は2.8mを測る。土層の堆積状況は、表土（155cm）、暗茶褐色土層（10cm）、白灰色粘土層（10cm）、暗茶褐色粘土層（35cm）、青灰色砂質土層となっている。暗茶褐色粘土層から植物遺体が多く検出された。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(5) 6-D 調査区

この調査区の地表面での標高は2.8mを測る。土層の堆積状況は、表土（165cm）、暗茶褐色粘土層（5cm）、白灰色粘土層（10cm）、暗茶褐色粘土層（35cm）、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(6) 6-E 調査区

この調査区の地表面での標高は2.9mを測る。土層の堆積状況は、表土（170cm）、黒褐色粘土層（10cm）、暗茶褐色粘土層（45cm）、青灰色砂質土層となっている。暗茶褐色粘土層の中に白灰色粘土がところどころに筋状に混入している。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(7) 6-H 調査区

この調査区の地表面での標高は1.5mを測る。土層の堆積状況は、表土（15cm）、明褐色粘土層（20cm）、赤褐色粘土層（25cm）、黒褐色粘土層（20cm）、暗茶褐色粘土層（15

cm)、白灰色粘土層 (10cm)、暗茶褐色粘土層 (15cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(8) 6-I 調査区

この調査区の地表面での標高は1.5mを測る。土層の堆積状況は、表土 (15cm)、明褐色粘土層 (20cm)、赤褐色粘土層 (30cm)、黒褐色粘土層 (10cm)、暗茶褐色粘土層 (15cm)、白灰色粘土層 (10cm)、暗茶褐色粘土層 (15cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(9) 6-J 調査区

この調査区の地表面での標高は1.5mを測る。土層の堆積状況は表土 (20cm)、明褐色粘土層 (20cm)、赤褐色粘土層 (30cm)、暗茶褐色粘土層 (20cm)、白灰色粘土層 (20cm)、青灰色砂質土層となっている。特に6-I 調査区以北で見られる黒褐色粘土層がこの調査区では若干見られるが、南に向かうにつれて消失している。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(10) 6-K 調査区

この調査区の地表面での標高は1.5mを測る。土層の堆積状況は、表土 (20cm)、明褐色粘土層 (25cm)、赤褐色粘土層 (40cm)、白灰色粘土層 (10cm)、暗茶褐色粘土層 (15cm)、青灰色砂質土層となっている。また黒褐色粘土層については完全に消失している。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(11) 9-E 調査区

この調査区での地表面での標高は2.9mを測る。土層の堆積状況は、表土 (190cm)、白灰色粘土層 (15cm)、暗茶褐色粘土層 (30cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(12) 9-H 調査区

この調査区の地表面での標高は1.4mを測る。土層の堆積状況は、表土 (15cm)、明褐色粘土層 (15cm)、赤褐色粘土層 (35cm)、暗茶褐色粘土層 (10cm)、白灰色粘土層 (10cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

(13) 12-B 調査区

今回の調査で設置した調査区では最も北に位置しており、地表面での標高は3.0mを測る。土層の堆積状況は、表土 (180cm)、暗茶褐色粘土層 (55cm)、青灰色砂質土層となっており、暗茶褐色粘土層から土師器の甕形土器の口縁部1点、胴部4点出土している。第5図1で示すように複合口縁をもつもので、頸部が「く」の字形に屈曲する。技法的には口縁部内外面ともヨコナデで、頸部以下の内面はヘラ削りが施されている。

(14) 12-C 調査区

この調査区の地表面での標高は3.0mを測る。土層の堆積状況は、表土(210cm)、暗茶褐色粘土層(10cm)、青灰色砂質土層となっており、暗茶褐色粘土層から須恵器の細片1点が出土したが、かなり風化がすすんでいる。

(15) 12-D 調査区

この調査区の地表面での標高は2.9mを測る。土層の堆積状況は、表土(210cm)、暗茶褐色粘土層(5cm)、青灰色砂質土層となっており、暗茶褐色粘土層から、第5図2で示すような土師器の甕形土器の口縁部1点、胴部2点出土した。第5図1と同様、複合口縁をもつもので、頸部が「く」の字形に屈曲する。技法的には口縁部内外面ともヨコナデで、頸部以下の内面はへら削りが施されている。

(16) 12-E 調査区

この調査区の地表面での標高は2.9mを測る。土層の堆積状況は、表土(210cm)、暗茶褐色粘土層(15cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物の検出できなかった。

(17) 12-H 調査区

この調査区の地表面での標高は1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土(20cm)、明褐色粘土層(35cm)、黒褐色粘土層(45cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれも遺構・遺物は検出できなかった。

(18) 12-I 調査区

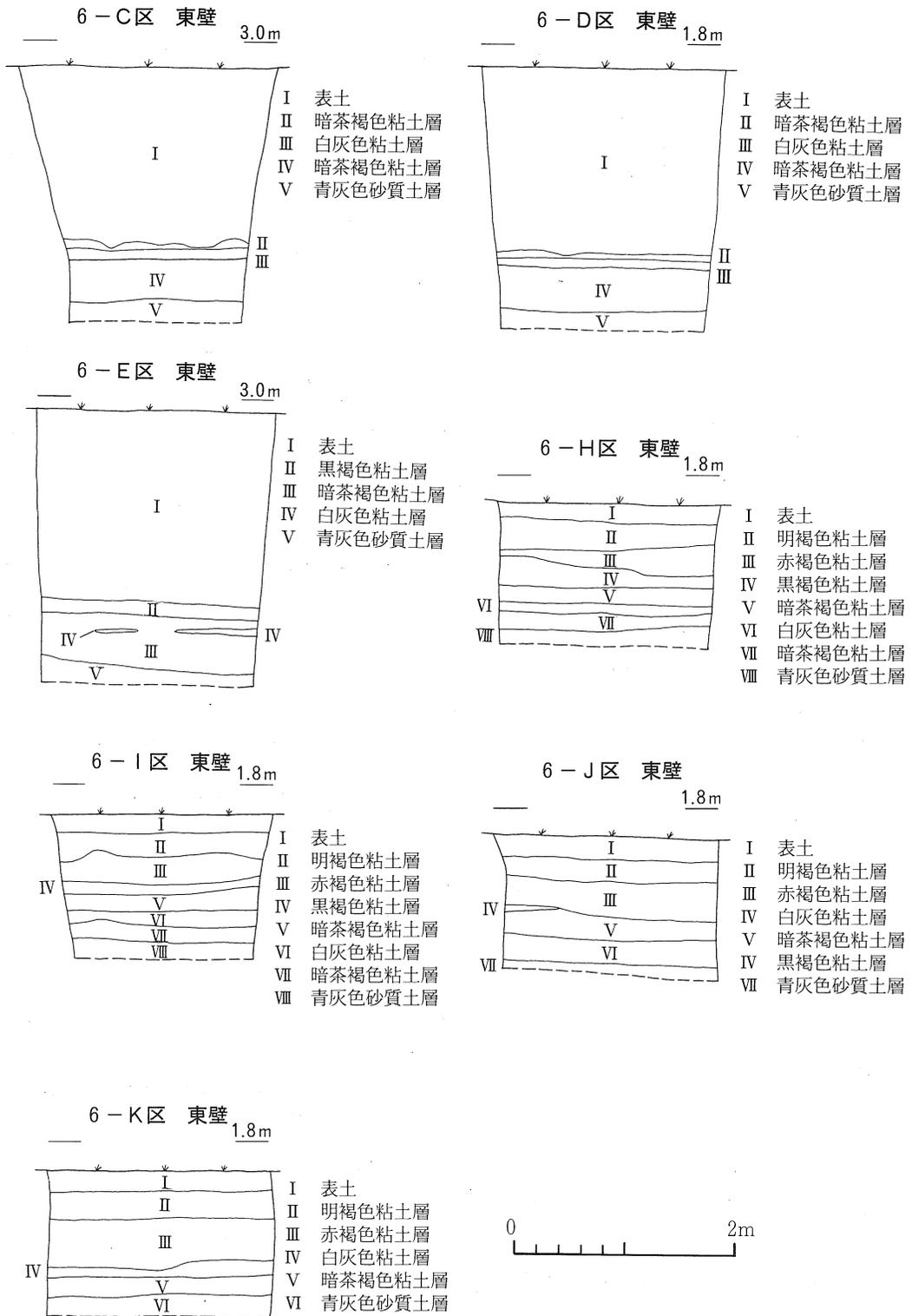
この調査区の地表面での標高は1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土(20cm)、明褐色粘土層(30cm)、黒褐色粘土層(30cm)、白灰色粘土層(10cm)、青灰色砂質土層となっている。黒褐色粘土層から第5図3で示すような土製品1点出土している。これは円柱形を呈しており、整形は手捏ねにより、2ヶ所穿孔してあるが、時期・用途については不明である。

(19) 12-J 調査区

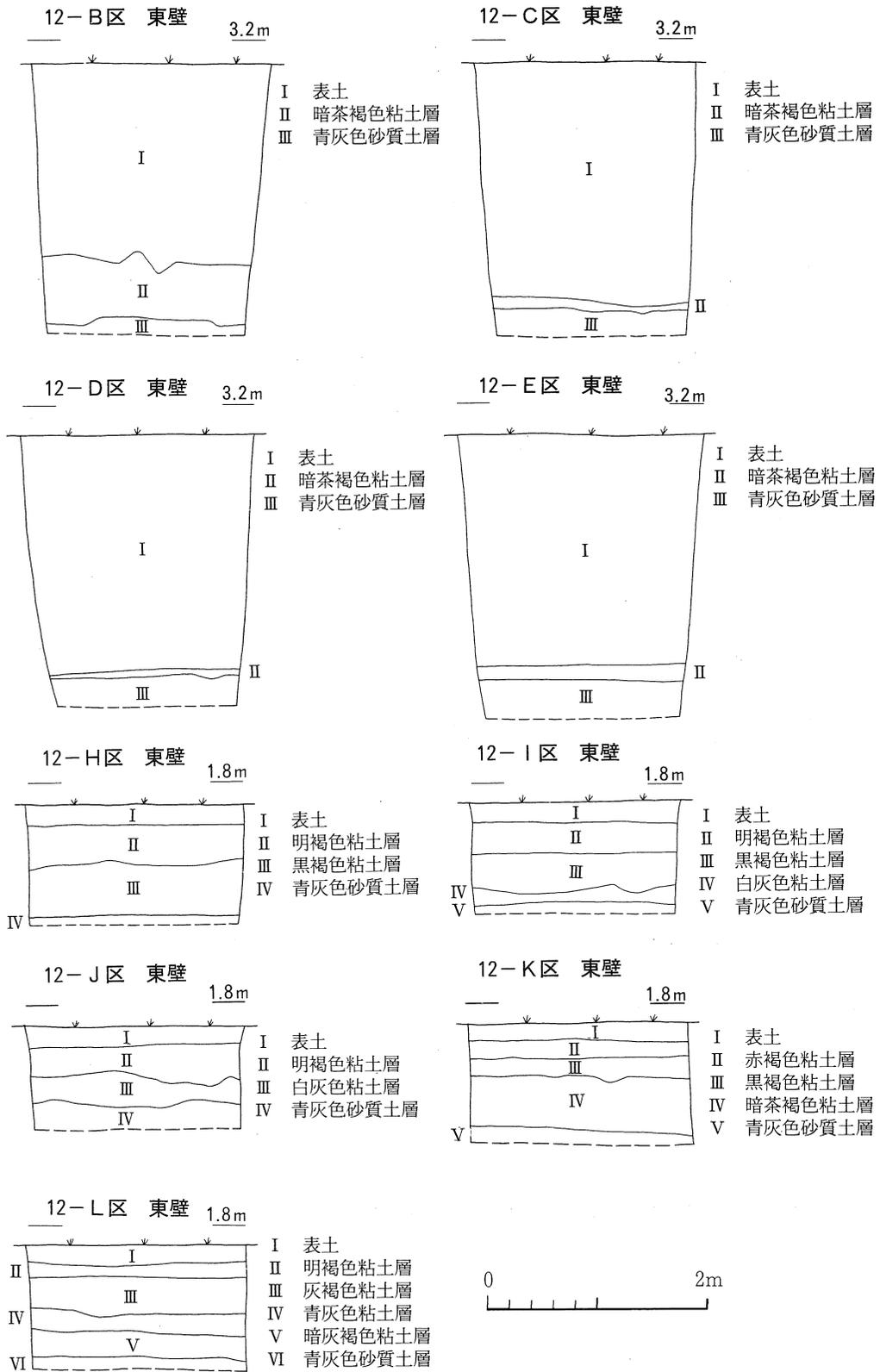
この調査区の地表面での標高は1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土(20cm)、明褐色粘土層(25cm)、黒褐色粘土層(25cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物を検出できなかった。

(20) 12-K 調査区

この調査区の地表面での標高は1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土(15cm)、赤褐色粘土層(15cm)、黒褐色粘土層(20cm)、暗茶褐色粘土層(50cm)、青灰色砂質土層となっている。暗茶褐色粘土層の中には白灰色粘土がブロック状に混入している。いずれの層



第3図 6ライン土層断面図 (1:60)



第4図 12ライン土層断面図 (1:60)

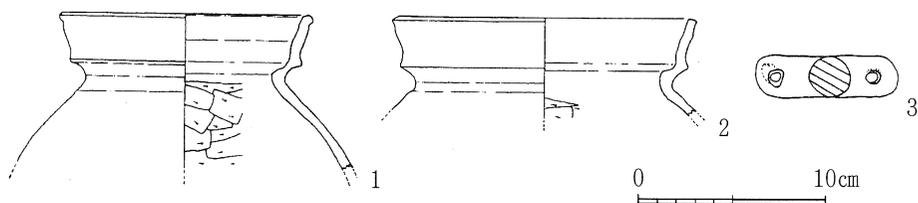
も遺構・遺物は検出できなかった。

Q1) 12-L 調査区

今回の調査で設置した調査区では最も南に位置しており、地表面での標高は1.6mを測る。土層の堆積状況は、表土(15cm)、明褐色粘土層(10cm)、灰褐色粘土層(35cm)、青灰色粘土層(15cm)、暗灰褐色粘土層(25cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。

Q2) 14-E 調査区

今回の調査で設置した調査区では最も東に位置しており、地表面での標高は3.0mを測る。土層の堆積状況は、表土(160cm)、黒褐色粘土層(20cm)、暗茶褐色粘土層(20cm)、白灰色粘土層(5cm)、暗茶褐色粘土層(5cm)、青灰色砂質土層となっている。いずれの層も遺構・遺物は検出できなかった。



第5図 出土遺物実測図(1:4)

V 過去の出土遺物について

修理免本郷遺跡から出土している遺物のほとんどは、1967年(昭和42)3月の土地改良中に発見された遺物であり、土師器・須恵器・土師質土器・田下駄・木杭・流木などがある。

これらは深さ70cmの土中から出土したということで、土器の大部分は遺跡の西側からかなりの量が出土しているが、破片がほとんどで、風化しているものが多い。また、東側からは木製品・木杭・流木が採集されている。田下駄については、菱根遺跡南の国道脇から1点出土している。木製品・流木については残存状態が悪いため、ここで取り扱うことはできない。なお、土師器・須恵器・土師質土器・田下駄については実測可能なものを図示し、以下のように観察した(第7、8図)。



A. 田下駄 B. 流木、木杭 C. 流木 D. 土器 E. 土器 ■ 今回の調査区
 第6図 修理免本郷遺跡遺物出土地点 (1:3,500)

1. 土 師 器

土師器は出土遺物の中では最も多く出土しており、甕形土器・高坏形土器・低脚付坏形土器などが出土している。これらは完形品はなく、ほとんどが破片で出土しており、風化が著しい。また全体の器形、調整、文様など明確に認められるものは少ない。

甕形土器（第7図1～3）

単純口縁をもつもので大きさにばらつきがあり、すべて破片で出土している。口縁部は逆「ハ」の字形に開き、大きく外反する。技法的には口縁部内外面ともヨコナデ、胴部内面はヘラ削りが施してある。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は黒灰色または褐色を呈している。

高坏形土器（第7図4、5）

高坏形土器はすべて破片で出土しているため、全形を窺うことはできないが、裾部が大きく開くものと、筒部と裾部の境が不明瞭で緩いカーブを描いて広がるものがある。胎土は精良であり、焼成はやや不良である。色調は茶褐色を呈している。

低脚付坏形土器（第7図6）

「ハ」の字形に広がる低く小さな脚部に、内湾しながら立ち上がる坏部を付ける。坏部に比して脚部が小さいのが特徴である。坏部内外面ともナデ、脚部内面はナデ、外面はハケメの後ナデが施してある。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は明黄灰色を呈している。

2. 須 恵 器

須恵器は甕形土器・高坏形土器・蓋形土器・坏形土器などが出土しているが、土師器より比較的出土状態が良く、完形品あるいはそれに近いものが数点出土している。

甕形土器（第7図7、8）

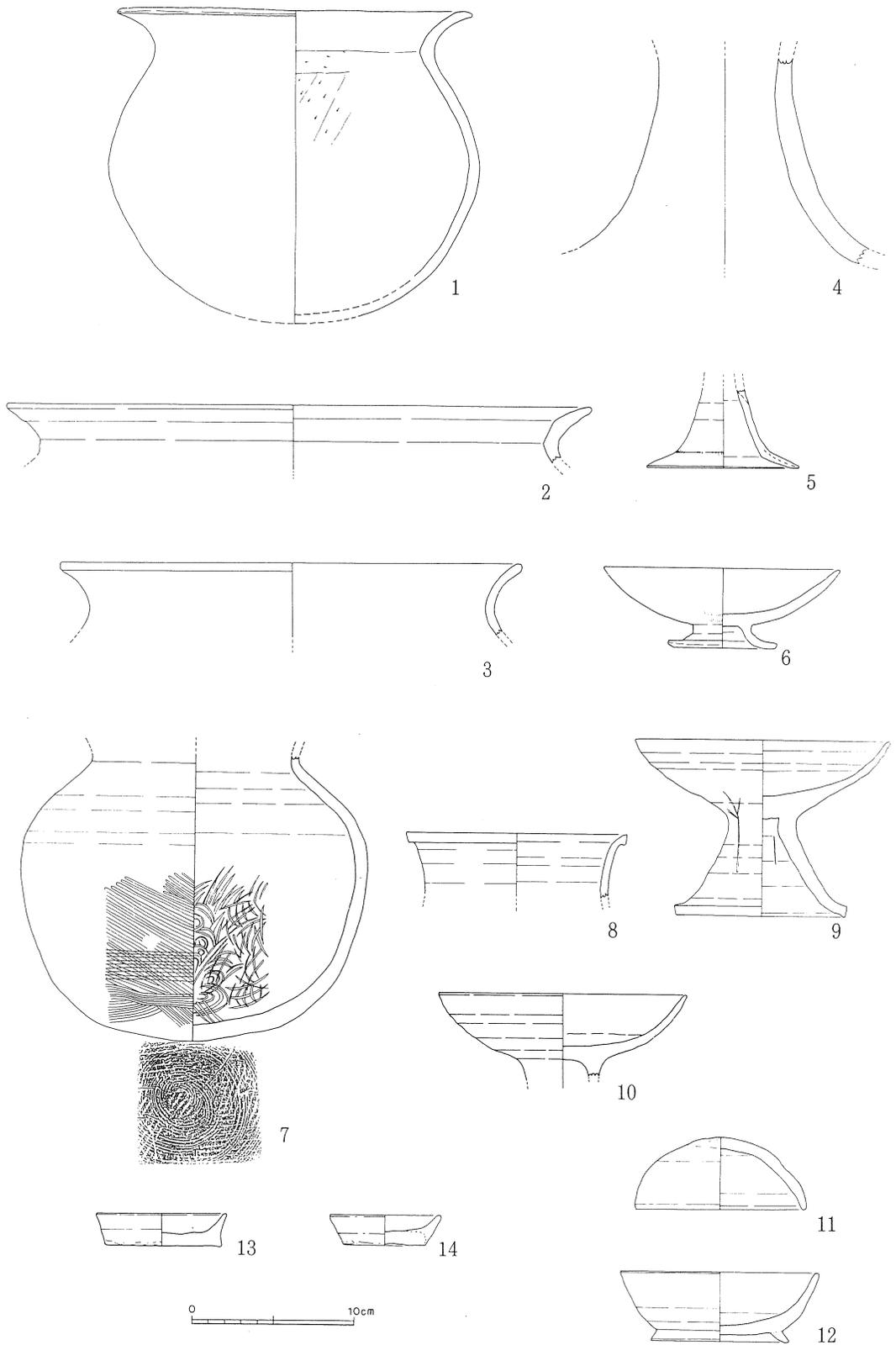
甕形土器はすべて破片で出土しているため、全形を窺うことはできない。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は青灰色を呈している。

高坏形土器（第7図9、10）

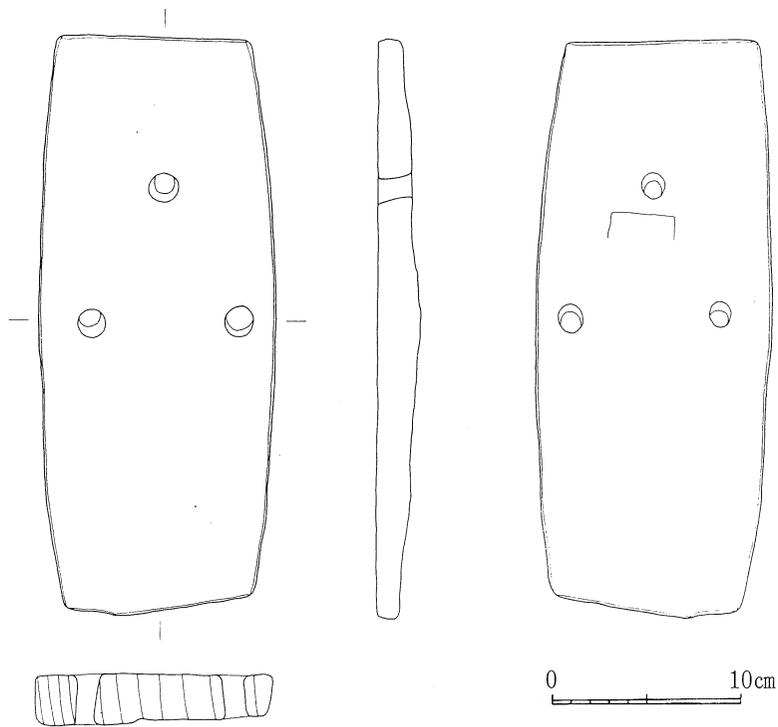
「ハ」の字形に広がる脚部に、内湾気味に立ち上がる坏部を付ける。線状の透かしが二方向にある。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は明青灰色を呈している。

蓋形土器（第7図11）

蓋坏の蓋で、天井部から丸く弧状に口縁部に至り、半球状を呈す。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は明褐色を呈している。



第7图 出土遺物実測図 (1:4)



第8図 出土遺物実測図 (1:4)

坏形土器 (第7図12)

蓋杯の杯で、「ハ」の字形の低い高台をもち、体部は内湾気味に立ち上がる。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は暗青灰色を呈している。

3. 土師質土器 (第7図13、14)

土師質土器は他に比して出土量はきわめて少なく、図示できたのはやや小型の坏形土器2点だけであった。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は黄褐色または淡赤褐色を呈している。

4. 田下駄 (第8図)

田下駄は1点出土している。木取りは柂目である。全長29.8cm、幅12.2cmを測り、平面形は長方形である。中央部分は身の厚さが2.2cmあり、両端部に向かって徐々に厚さを薄くしている。表面は比較的ていねいに仕上げが施されていて、裏面はやや粗い加工痕がある。身には円形の孔が3ヶ所穿たれている。

VI ま と め

今回の調査は、これまで偶然の機会に出土した遺物を中心に把握されていた修理免本郷遺跡の実態を解明するために、主に範囲確認を目的として実施したが、遺構は検出されなかったため、本遺跡の性格を明らかにするには至らなかった。

本遺跡の土層堆積状況は、基本的には表土、明茶褐色粘土層、赤褐色粘土層、黒褐色粘土層、暗茶褐色粘土層、青灰色粘土層となっていてほぼ均一的に堆積している。白灰色粘土については、多少ばらつきがあり、本遺跡の南側については10～20cmとほぼ均一堆積していたが、北側については消失している調査区がある。

また青灰色砂質土層以下については、湧水量が多く調査を行うことができなかったため、層位及び遺構・遺物についての確認はできなかった。

国道より北側の調査区については、出雲大社教の神楽殿御造営の際に残土を搬入し、重機によりいったん表土をはぎ取り、そこへ残土を盛り、さらにその上にはぎ取った表土を盛ったものと考えられるため、従来の層位がかなり消失しているため、正確な資料を得ることはできなかった。

出土遺物については、今回の調査区の東側半分より暗茶褐色粘土層から古墳時代の土師器・須恵器などが若干出土した程度であり、西側半分については出土しなかったことから、修理免本郷跡の西端に近い位置ではないかと考えられる。

しかし、各層の具体的な堆積時期については、偶然発見された遺物がほとんどであり、遺構を伴ったものではないため、年代的位置付けするのは層位的にも不明瞭である。

したがって、今後このような調査を機会あるごとに行うことによって、さらに遺跡の性格を知ることができるであろう。

土器・土製品観察表

挿図 番号	器 種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
5-1	土師・甕形土器	復元 口径 13.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁でゆるやかに外反し、端部は外側に膨らみ、丸く終わる。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面へラ削り。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 暗灰色 風化がすすんでいる。 外面炭化物付着
-2	〃	復元 口径 16.0	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁でゆるやかに外反し、端部は外側に肥厚し、平坦面をなす。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面へラ削り。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 暗灰色 外面炭化物付着
-3	土 製 品	長さ (7.7) 径 (2.3)	円柱形を呈す。	整形は手捏ねによると思われる。	胎土 精良 焼成 良好 色調 茶褐色 重量 44.0 g
7-1	土師・甕形土器	口径 22.0	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反する。胴部は球形を呈す。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面へラ削りの後ナデ。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 黒灰色 風化が著しい。
-2	〃	復元 口径 36.6	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内外面ともヨコナデ。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 茶褐色 風化が著しい。
-3	〃	復元 口径 28.6	頸部はゆるやかに屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内が面ともヨコナデ。	胎土 小砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 明褐色 風化が著しい。
-4	土師・高环形土器		裾部はゆるやかに広がるものと思われる。	調整不明	胎土 小砂粒を多く含む。 焼成 やや不良 色調 明褐色 風化が著しい。
-5	〃	復元 底径 9.6	筒部と裾部の境で急激に屈曲し、裾部は大きく広がる。	内面ナデ。外面筒部と裾部の境に縦方向の刷毛目の後ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 黄褐色 風化がすすんでいる。
-6	土師・低脚环形土器	口径 14.8 底径 6.3	坏部は内湾しながら立ち上がる。底部には短い脚部がつき「ハ」の字形に広がる。	内面ナデ。外面刷毛目の後ナデ。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 明黄灰色 風化がすすんでいる。

挿図 番号	器 種	法量 (cm)	形態の特 徴	手法の特 徴	備 考
7-7	須恵・甕形土器		肩部は張り、胴部はほぼ球形を呈す。	肩部内外面とも回転ナデ。胴部内面タタキ。同外面タタキ後カキ目。	胎土 精良 焼成 良好 色調 明青灰色 うぐいす色の釉がかかる。
-8	須恵・甕形土器	復元 口径 14.0	口縁部は外反しながら、立ち上がる。端部は肥厚し、平坦面をなす。	内外面とも回転ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 暗青灰色
-9	須恵・高坏形土器	口径 16.0 脚端形 10.6 器高 11.1	口縁部は内湾しながら立ち上がる。脚部は裾広がりの「ハ」の字形を呈す。二方向に線状の透かしが穿れている。端部は平坦面をなす。	口縁部内外面とも回転ナデ。坏内面底部静止ナデ。脚部内外面とも回転ナデ。	胎土 小砂粒を含む。 焼成 良好 色調 明青灰色
-10	〃	口径 15.6	口縁部は内湾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。内面は指による押圧の後ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 明青灰色
-11	須恵・蓋形土器	口径 10.7 器高 4.6	天井部から丸く弧状に口縁部に至り反球状を呈す。	体部内外面とも回転ナデ。天井部内面回転ナデ。同外面ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 明褐色
-12	須恵・坏形土器	口径 10.4 底径 8.6 器高 4.3	「ハ」の字形の低い高台をもつ。体部は内湾気味に立ち上がる。	体部内外面とも回転ナデ。底部内面ナデ。同外面回転ナデ。高台は貼り付け。	胎土 精良 焼成 良好 色調 暗青灰色 風化がすすんでいる。
-13	土師質・坏形土器	口径 8.2 底径 7.3 器高 2.1	底部は平底で、体部は逆「ハ」の字形に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 黄褐色
-14	〃	口径 6.7 底径 5.0 器高 1.9	底部は平底で、体部は逆「ハ」の字形に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	胎土 精良 焼成 良好 色調 淡赤褐色

図

版



遺跡遠景（上空西から 点線内は調査地点）



遺跡近景（西から）



重機掘削風景



発掘作業風景



6 - H 調査区土層堆積状況



6 - K 調査区土層堆積状況

图版 4



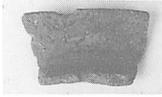
5-1



5-2



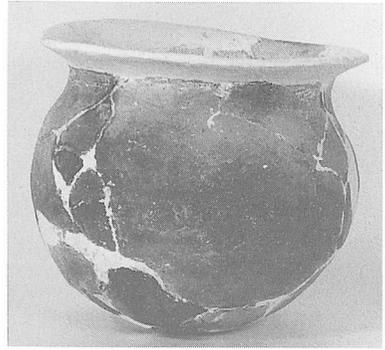
5-3



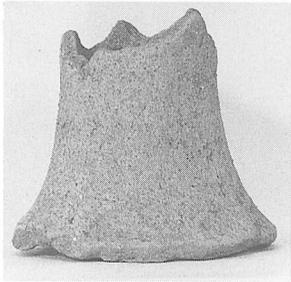
7-2



7-3



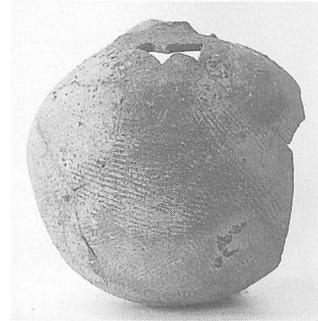
7-1



7-4



7-5



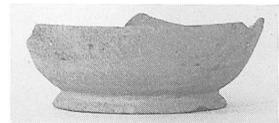
7-7



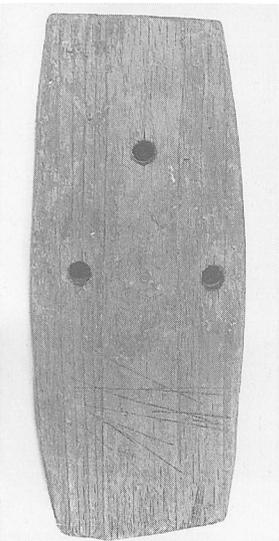
7-9



7-10



7-12



8 田下駄

出土遺物

修理免本郷遺跡

発行 平成 4 年 3 月

編集 大社町教育委員会

〒699-07

島根県簸川郡大社町大字杵築南1259-5

☎ 0853-53-4441

印刷 玉 木 屋 印 刷